日本看護科学会誌にみる研究の動向

第12回学術集会シンポジウム「看護における研究の方向」から

小 玉 香津子*

Trends in Research—An Analysis of Studies Published in Journal of Japan Academy of Nursing Science from 1987-1992

Kazuko Kodama

Japanese Red Cross College of Nursing

はじめに

私が本学会誌の編集委員長をつとめた1987年から92年までの6年間に、投稿論文数は69であった。はじめの4年はそれぞれ6, 9, 8, 9と数は横ばいであったが、91年は15, 92年はあとひと月を残してすでに22, とここへきて大幅に投稿がふえている。これら投稿論文の約半数は本学会の年次学術集会における発表を原著にまとめたものである。そこで、その学会発表のほうの数の動きをみると、60, 56, 65, 75, そして91年は89, 92年は107とやはり同じようなふえかたである。

研究発表の数が増加したからといって学会員各員の研究生産性が高まったわけではない。学会員の数も同様なふえかたをしている。とはいえ、学会としての研究生産性はまちがいに高まりつつある。このシンポジウムで看護研究の行く手を展望するにあたり、「研究の動向」と題して、まずはこれまでの研究蓄積をどうみるか、そのみる目を問うことができるのは、このように研究の数がふえてきたからこそであろう。

ところで上にあげた数字は投稿と学会発表の数であり、研究生産性をうんぬんするならば正

確には査読をパスして学会誌に掲載された論文について言わねばならない。いや、生産性に限らず、およそ学会誌に研究の動向を探ろうとするなら、掲載論文を対象とするのが妥当であろう。実際は、69の投稿のうち掲載となった論文は39であった。以下ではこの39論文について、いくつかの観点から、看護研究の動向を暗示すると思われる事象を取り出し、若干の考察を試みる。もしかしたらそこに、問題とみなすべき何かが見出されるかもしれない。もしかしたらそれは、39論文を越えて看護研究一般の問題であるかもしれない。

1. 研究疑問の傾向

39論文の約3分の1がいわゆる基礎研究であった。「生物学的側面や行動のfundamental processに焦点をあてた研究」(中西, 1987)である。具体的には、特定の対象集団の栄養や睡眠や心拍の状態について、あるいは特定の環境の細菌汚染の様相について、特定条件のものと体圧分布についてなどの、基礎的データを入手するための研究が行われていた。何かの測定道具としての尺度を作成した研究も基礎研究に入るだろう。残りの3分の2はいわゆる看護実践研究であっ

*日本赤十字看護大学

た。ケア研究とも呼ばれる類の研究である。

つまり、学会誌においては、看護の働きかけの効果確認、患者に負担の少ないケア方法の開発、自立を促す援助プロセスの解明、より適切な患者理解、などを直接の目的とする実践研究のほうが、基礎研究よりも明らかに多い。さらにいえば、基礎研究とみなされる研究も例外なくケアへの応用を示唆しているので、「看護についての研究はいつ始まるのか」とV. ヘンダーソンが35年前に心配したような事態にないことは確かである。むしろ、看護管理や看護教育が直接の焦点である研究が学会誌にまったくないことは問題なのかもしれない。また、実際上の問題に対応するのではなく、基礎研究によって系統的に看護学を探究していく研究者の確保がなされているのかどうか、気にならなくもない。

理論開発に焦点をあてた研究はごく最近になって1, 2出てきた。

研究疑問の傾向をもう少し内容的につかむために、研究の焦点が身体にあるかそれとも人間関係を含む心理にあるかをみると、もっぱら心理の変化を“測った”研究は39のうち5であり、自立プロセス、喪失と悲嘆プロセス、受容プロセス、共感、負担感がそれらの焦点であった。ではその他の研究はすべて身体にのみ焦点をあてているかというところではない。身体と心理の両方をみつめている、というより、そのどちらかに焦点があるようにみえても必ず他方に視点を拡げている研究が少なくないのである。

しばしば使われるQOLや保健行動などの概念はもちろんのこと、そもそも看護実践なるものが身体をみるかそれとも心理をみるかのどちらか一方であることはないのだから当然であろうが、たとえば不安を測るのにそれ用に作られたスケールを使う傍ら血圧や脈拍や血液中のカテコールアミンなどを測る、また、術後の栄養状態を身体計測によって調べ摂取量も測る傍ら摂食行動の心理をも問う、というように、多くの研究において研究作業は心身両面にアプローチしている。

この傾向はそれらの研究の結果をばやけさせることにつながっている感があるのだがどうだろうか。そればかりでなく、この種の論文を読

んでいると、研究疑問そのものがあいまいな問いにみえてきてしまうことが間々あった。このことは、あいまいな問いにはあいまいな答が、といって済ますわけにはいかないように思う。

先に述べたように看護実践研究が多いことから、身体をみようが心理をみようが多くの論文の研究疑問は実践の根拠を求めるためのものであった。このことは正当かつ喜ぶべきことであろうが、ひとつ、そうした疑問から出発する研究は、どうかすると研究者が自分の正しいことを実証しようとする研究になる可能性があるようである。また、いうところの“車輪の発見”をして、自分の知っている車輪であることだけを確認めて安心し、何であるか解らないものを発見することを無意識に退けてしまう、そういう可能性もあるように思われる。その場合、退けてしまったものこそが本当の発見であるかもしれないのである。しかし、思うにはじめて発見したことを(たとえば新しい変数として)分類したり命名したりするのは容易ではないが、発見したものが“車輪”であれば比較的それをしやすいだろう。論文にも書きやすいだろう。

実践の根拠を求めるための研究疑問の対極にあるのが真実を知ることを求める研究疑問である。この種の疑問は答えることよりはそれを問うこと自体に意味をおく研究を導き、その研究は考察を目的とするのだが、そのような研究は1, 2を数えるのみであった。その1, 2の研究では、研究者は自らの内で十分に育てた研究動機をもち、先行研究を自分の問いのためにクリティークしている。客観的にクリティークするのではなく自分の問いのためにクリティークしているから、クリティークがそのまま論文に出てくることはない。

研究疑問に関してもうひとついえば、学会誌は今年で12巻を数えるのだが、同一研究者がひとつの疑問を追究し続ける過程は誌上では未だ目立たない。慢性疾患患者の療養援助というテーマの周辺にその気配がみられるのみである。この研究領域では、ひとりだけ、同一研究者が6年間に単著と筆頭著とで2回論文を載せており、加えて未発表の投稿もあり、この研究者が問いの流れをもっていること、流れの先のほうの新

たな問いを自他に生じさせる力量をもっていること、を想像させられる。

慢性疾患患者の療養援助というテーマの周辺に一群の研究者が集合して研究を重ねている様子は、グループで行ったその領域の研究に、そのグループの研究者達による先行研究の引用が多いことから推測できる。引用といえば、39の掲載論文のうち、引用文献に著者自身あるいは著者ら自身の研究があげられていた論文は12であった。後述するように筆頭者と指導者との共同研究が多い事実を考え合わせると、指導者の研究が先行してこそその共同研究のはずであるから、この数は少なくはないだろう。

その12論文のうち5つが単著であったが、それらには研究者自身の先行研究が最多5つ、最少2つ引用されていたことを記しておく。本学会誌だけからはつかみにくい、問い続ける研究者看護婦が確かにいるのである。

2. 誰が研究しているか

39論文中、単著は12である。その倍以上が共著であり、共著者数の最大は9人、最も多いのが研究指導者と思われる者との2人共著ないし3人共著であった。

39論文はひとつを除いた他はすべて短期大学を含む大学でなされた研究であり、そのうち30が4年制大学でなされていた。大学の教員、とくに研究指導をする立場にある教授は、第二著者、第三著者として繰り返し論文に登場するが、筆頭者はその都度変わる。これは掲載論文の多くが修士論文を原著にまとめたものだからである。すなわち、研究論文のほとんどが大学から出てはくるが、必ずしも大学の教員が自分の問いを研究しているというわけではなく、彼らはおもに研究の指導をしている様子がうかがえるのである。

ただし、何らかの主題についての総説を誌上に発表した大学教員がこれまでに数人おり、看護学におけるある領域の系統的全体性を把握しているそれら著者に代表される大学教員が、看護研究を支える大きなパワーであることは事実であろう。

教授単独の原著投稿ならびに掲載は最近になっ

てはじめて2件あった。

そうしたなかでひとつだけ、大学ではなく病院から寄せられた研究で単著、研究者自身の先行研究が4つある論文のあったことには注目させられた。

誰が研究しているかということでは、他分野の研究者との共同研究の傾向はどうであろうか。39論文中、医師あるいは自然科学系の研究者が加わっているグループ研究は4つあった。これらが真の共同研究であるのか、つまり、その研究疑問が2つ以上の専門の観点を本当に必要としていたのかどうか、については吟味の余地があるかもしれない。

社会科学系の研究者との共同研究がないことは、対象のholistic把握という看護学の基本と、後述するように調査を含むフィールド研究の多い事実とに思いを及ぼすと意外である。一方医師との共同研究は、投稿状況をも考えてみると、経常的に進められているように思われる。掲載された共同研究についての上記の吟味の結果しだいではあるものの、看護研究先進国のアメリカと傾向を異にして、日本には看護学と医学との共同研究がそれならではの発見をもたらしていく路線が確立する可能性があるとみてよいのだろうか。

3. 研究方法の傾向

学会誌掲載論文全数の4分の3がフィールドを使う研究であった。現場でなされた研究が多数派であったということである。残りの4分の1は実験室研究と文献研究である。

フィールド研究の対象は患者、産婦、老人、障害児とその家族、などさまざまで、その数は最少1人、すなわち事例研究、から調査研究の場合の最大100人まで幅がある。実験室研究は被験者が健康な成人に限られ、そのほとんどが看護学生であることが特徴である。こちらは数の最少が5人、最大が30人であった。

信頼性と妥当性が検討済みの既製の研究道具の使用状況をみると、3分の1の研究が主として心理面を測る道具、すなわち不安スケール、モラールスケール、コーピングスケールなどを使用して、やはり3分の1が身体面を測る

道具、すなわち血圧計、心拍計、テレメーター、ガスモニター、ポリグラフなどを使用している。培地を使った研究もひとつあった。残りの3分の1の研究は既製の研究道具を使っていないが、自作の調査表を使った調査研究がここに含まれる。

ということは、絶対多数の研究が何らかの変数の測定値を出した、いわゆる量的研究であり、その結果として、検定を中心とする統計処理を行っている研究が多い。39のうち24がそうであるほか、検定以外の量的扱いをしている研究が9、あわせて34が量的研究であった。そして残る5つがいわゆる質的研究であった。

この5つの研究は、標題に、自立を促す看護、共感の構造、療養のありよう、などの表現があって特異であるが、共通の特徴は

- ①分析のかたちはとっていても、研究全体としてはまとめる方向を目指していること
 - ②複雑で法則性などないような現象をよくみつめて、かすかな法則性を見出していること
- にあると思われる。

①は、およそ複雑な事象を扱う研究であれば必ずそなえているはずの特性であろう。②は、変数、あるいは条件と言ったほうがよいかもしれないが、そのわずかな違いが、結果においてもわずかな差になるのではなく、結果においては大きな差になることを示唆するような発見をしている、という特性である。5つの質的研究にみられる②の特性は、質的研究も“差を測る”とみなすことができるのではないかと我々に思わせ、その延長線上に、量的研究と質的研究とが単に相補的に存在するにとどまらず、両方の特性をもった新しい研究方法が生まれつつあるのではないかと期待が生じる。

研究方法に関してもうひとつ見てとれるのは、量的研究にしる質的研究にしる、ある研究方法を自分のものとした研究者が、その方法を使い、テーマを変えて研究を重ねる傾向のほうがある研究者が同じテーマを方法を変えて追究する傾向よりも目につくことである。研究者各人が

自分の使いこなせる研究方法をひとつもっていることは一般に好ましいとされるのであろうが、それがあまりにも徹底すると、研究のテクニク性が強くなり、発見がいわば機械的になされるようなことにならないだろうか。量的研究についても質的研究についても懸念されるところである。

おわりに

最近6年間の日本看護科学会誌に掲載された39論文を直接の分析対象とし、看護研究の動向を暗示すると思われる事象を取り出して見解の一端を述べた。これまでの蓄積をみる目を問うことを試みたつもりである。私にこの作業をさせたのは、計12冊の学会誌の編集過程で反芻してきたいくつかの疑問であり、その具体については学会誌第12巻第3号、第12回学会講演集に記した。

参考文献

- 1) Gortner, S.R., Edit., Nursing Research Resource Development, International Journal of Nursing Studies, 27 (2), 1990.
- 2) Gortner, S.R., Nahm, H., An Overview of Nursing Research in the United States, Nursing Research, 26 (1), 1977.
- 3) オギソ, T., 輪湖史子訳, 研究なくして健康なし—ICNの研究推進プロジェクト, INR日本版, 14 (2), 1991.
- 4) ヘンダーソン, V., 小玉香津子訳, 看護研究—その発展の経過と現状, ヴァージニア・ヘンダーソン論文集(増補版)所収, 日本看護協会出版会, 1989.
- 5) 中西睦子, 看護領域の用語に関する研究, 日本看護科学会誌, 7 (1), 1987.
- 6) ルードマン, R.S., 加藤道子訳, 看護研究の逆説的本質, 看護, 37 (5), 1985.
- 7) ウェリー, H.H., 看護研究展望, INR日本版, 1 (2), 1978.